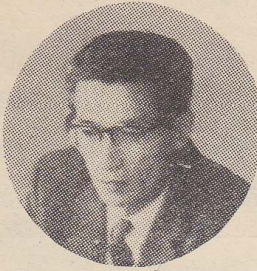


種苗交換会を共賛するに当って



共賛事務局長 蛇川文夫

第88回、秋田県種苗交換会が市内の農業団体をはじめ各農家の方々のご協力のもとに、18年ぶりに本市で開催されることになりましたことはこの上もない喜びを感じています。全県下から集められる農民の汗の結晶である農産物の展示、そして研究発表の討論に参加する農民の姿などを想像してみるにつけ、いかにこの会の存在が重要であるかがわかります。

共賛会としても、この交換会のもつ伝統とその意義を深くかみしめ、市をあげて協力して参りたいと考えていますので市民各位におかれましては、何卒ご協力くださるようお願いいたします。

種苗交換会の沿革

種苗交換会は明治11年12月、秋田市で開かれた「種子交換会」がはじまりです。

毎年のことながら、種苗交換会といえれば必ず話題にのぼる人に「秋田の二宮翁」といわれる石川理紀之助翁をあげることができま

す。石川翁は、明治の初年当時、一向に進歩のあとがなく、他人と協力して農業の進歩をはかろうとしなかった本県の農家の実態をふりかえり、当時、県の勸業課に出仕しながら農業改良に尽力、本県はおろか全国的に名の知られた農村の指導者でありました。

当時、石川翁は時の石田県令に意見をのべ、県内から農村指導者として4人の老農（大館の岩沢太兵衛氏、河辺の長谷川謙造氏、雄勝の糸川茂助氏、高橋正助氏）を県に招き、県の勸業係を命じて本県の農業改良に尽くすことになりました。

しかし、これだけの指導者をそろえても実績をあげることは容易ではなく、どうしても県民相互の親交と協力によらなければならぬことに想いをおこした。石川翁は、明治10年頃から県内の大小区長55名を協議員として勸業議会を設け、産業上有益な会議をもつにいたり、明治11年9月の会議で由利郡平沢町の精農家佐藤九十郎氏から「種子交換会」の意見が提出された。



第88回秋田県種苗交換会は、いよいよ11日から開かれる。

大館での開催は、明治42年（第32回）、昭和2年（第50回）、昭和11年（第59回）、昭和22年（第70回）について、今回で5回目の開催地になります。

しかし、大館市になってからは、今回がはじめての開催にあたるわけで、過去4回の開催は、いずれも大館町時代に開催されたものです。そのため今回の開催にあたっては市をあげて、この歴史と伝統ある交換会に協力することにしています。すでに、共賛会事務局では、各会場の

準備も終え、まちの要所要所には歓迎塔も出来あがり、まちは交換会のふたあけを待つばかりになった。

10年に1回しかおとずれない農民の最大の祭典、そして、種苗交換とともに歩んできた秋田県の農業の姿をふりかえってみるにつけても、市政施行以来、はじめての開催地として是非とも成功裡に終らせ、交換会の中核行事の一つである談話会においても、まがり角にきている本県の農業の指針を十分検討し、迷える農民の進路と営農に明るさを呼びもどすような交換会であって欲しいと願念する

その方法は「各区お勤業係は、おのおの担当区内の諸植物の見本、現品を毎年収穫の秋に、秋田市に持参して集まり、一般の人々に展示するとともに、必要な種子を互に交換すべし」というのであった。この意見が取上げられ、この年の12月に第一回の「種子交換会」が開かれたのが、いまの種苗交換のはじまりであると記録されています。

この第一回目の種子交換に集った人々は郡役所の勸業係、腐米改良係や篤農家たちで根付のままの植物見本にその種子と説明を添え、これを根・幹・皮・葉・花・実の6部におけ展示して優良種子交換の斡旋をしたりした。

また、これと同時に勸業談会を開いて農事の研究に広く意見を交換したのです。石川翁34才の時、この勸業談会こそ種苗交換会の最も重要な行事とされている「談話会」の前身とされています。

明治13年から石川翁の主唱によって種子交換会の出品物に審査を加えることに改め、明治15年には苗木の出陳を加えて会名を「種苗交換会」と改称して今日にいたっております。

その間、日清、日露戦争や第二次世界大戦などに遭遇したが1回も休んでいない。この催しは、前半においては県事業として開催されたが実際の主導権を握っていたのは石川翁を会頭とする「農話連」の人々で、県が経費の関係で見合せた年でも農話連独自で経費を出しあって完

全に交換会の実を継承していました。

明治34年、農会法制定によって、この年から民間団体である秋田県農会が主催し、その後昭和18年からは秋田県農業会、昭和26年からは、秋田県指導農業協同組合連合会、昭和29年からは、秋田県農業協同組合中央会、というように機構の変改によって主催が受けつがれております。

そして交換会は、その内容も規模も回を重ねるにしたがって改善され、石川翁について森川源三郎翁、斎藤宇一郎翁などの先覚者がこの会を育成強化した。

その後農業界の先輩がこれを受けついでますます盛んにしたが、近年、片野重脩氏が交換会の運営に刷新を加え、農業秋田の全国的大行事として確固不動なものにしたのです。

交換会の会場は明治41年までは秋田市で開かれたが42年以来、開催地を各都市の輪審制として10年に1回ずつ各都市で開催し、開催地では協賛会を組織し、盛んな協賛行事を織りこんで人出を吸引し地方の繁栄につとめてきた。

交換会の中核行事として主催者が主力を注いでいるのは、農産品の展示と談話であります。この席上会員は、互いに貴重な農事上の体験談を交換して、その体験発表にもとづいて当局もそれぞれ意見をのべて秋田県農業の進路と農営のあり方を真剣に検討しており、ここに種苗交換会がもつ最も重要な意義があるので